

傾城水滸伝

曲亭馬琴著。一八二五年（一八三二年刊）。中国の『水滸伝』を種本に、中国を日本に置き換えるだけではなく、百八人の中国の豪傑を、すべて女の豪傑に切り替え、男中心の力や武芸の世界を、女中心の世界に逆転してみせた合巻。なお、次に紹介する亀菊、綾梭、衣手という三人の女の物語の骨格を一人の物語として綴ったのが明治十九年の『北山
霊験記 戸隠山鬼女紅葉退治之伝全』で、これが現在の鬼女紅葉伝承の大筋となっている。

戸隠が舞台となる個所までの粗筋。

亀菊という美貌の白拍子は、風雅の道の総てに優れ、男という男は心を惑わされて身の破滅となる者ばかり。とうとう訴えがあつて越後に追放されるが、やがて大赦があり再び都に上る。頼った先の小間物屋の紹介を経て、音曲の腕を買う法眼頭清に召し抱えられる。頭清の娘・尾弘の局を後鳥羽院は寵愛していたが、亀菊はふとした折りに羽根突きの妙技を好む院

の目に止まり、尾弘の局の元に置かれる。そして院の寵愛を一人占めにする事ともなる。尾弘の局は忘れられ、奢り高ぶる亀菊の機嫌に振り回されて周囲の人々には思わぬ不幸が起こって来る。

女武者所の綾梭が第一番の被害者で、無実の罪を着せられて命の危険を感じた綾梭は、母を連れて信濃路へと逃げて行く。一夜の宿を借りた水内郡・戸隠山麓の、女の多い女郎花村の村長の家で、母の急病から長逗留となり、その親切に報いる為に、村長の武芸気違いの娘衣手に、知る限りの武芸を伝授する事になる。

そして、みるみる上達した衣手の腕前を見とどけたところで、綾梭は甲斐の武田家を頼って去ることになり、戸隠に残った衣手は一人武芸に励むが、そこへ戸隠山に住む鬼女が手下を率いて襲ってくる。鬼女すなわち女盗賊は、昔、平維茂に討たれた鬼女の眷属の末で、第一の頭はぬばたまの黒姫、第二は越路の今半額、第三は戸隠の女鬼。その女鬼が衣手のいる女郎

花村を襲ったが、逆に生け捕りにされ、かくてはかな
わぬことと黒姫、今半額も三人一緒に首をはねても
らいたいと衣手に降伏。

衣手は、二人の情に感じて女鬼を解き放ち、三人は心
底から衣手の義に感じている。三人は椎茸と雉を贈り、
衣手はお礼に八月十五夜の月見に招待。それが役人
の耳に入って、酒宴のさなか、軍勢は家屋敷を取り囲
み、三人の引き渡しを迫ったが、義に厚い衣手は承知
せず、家に火をはなつて血路を切り開き、三人共々家
の奴婢ぬひも連れて戸隠山へと落ちのびる。はからずも
役人に追われる身となった衣手は、盗人暮らしをす
る訳にもいかず、三人に惜しまれながら、甲斐の武田
に行つた綾梭あやおはに相談しようとして旅立つ。

次に、「初編二冊目」から戸隠に関わる部分を幾つか抄
出する。なお適宜仮名に漢字を当てる。

○さる程に綾梭は髻たぶきを切り姿をやつし、母をのせたる
馬を追ふて信濃路へ走りつゝ、小道、枝道、そこは
かどなく、山又山に旅寝を重ねて、信濃の国水内郡

戸隠山の麓をよぎるに、日は暮れなんとする頃に思
わず宿をとり遅れて、あちこちと尋ぬるほどに、道
のほとり一町ばかり引入れたる木立のもとに、一構^{ひとかまへ}
の冠木門見えしかば、漸くにたどりつきて一夜の宿
を求めしに、主は六十路ばかりなる翁にて、(略)

○(翁の綾梭への語り)それがしは家代々村長をうけ
給はりて陸見庄内と呼ぼるゝ者也。又此所の里の名^{このところ}
を女郎花村と呼びなして、いかなる故か知らねども、
いにしへよりしてこの村には男少なうして女子多し。
又、北隣なる一里を鬼無里村と呼びなして、そこに^{ひとさと}
は男多くして女子は極めて少なかりき。こゝも以て、
昔よりかの村とわが里人と婚縁を結ぶ也。それがし
は幸なくて只この娘一人を持てり。(略)

○(戸隠山の三人の鬼女についての樵の横七の衣手へ
の語り。この横七が後に衣手と戸隠山の三人の女盗
賊の交わりを「水内の目代縄梨氏内」に密告し、軍
兵が衣手の宿所を取り巻くことになる)

1 越中の立山から地獄の鬼が店替したやら、戸隠^{たながへ}

山の紅葉もみぢばに妻乞ふ鹿さへ牛頭馬頭にゅうまづかと、人は恐るゝ
こゝらの風聞ふうぶん、山かせぎする者は久しく顎あごが乾上ひあが
つて、べちやアねへが鬼道きどうの苦しみを致しおります。

仏せん払ざくった詮索せんさくさ

2 さればとよ。定めて聞きも及ばせ給はん。近頃

戸隠山みたりに三人の鬼女棲みて、夜なく、近き里いに出で、
人を殺し、宝を奪ふ。その猛きこと大方おおかたならば（ず
カ）、むかし彼の山かに棲みたる鬼女の維茂殿に討たれ
しは、只一人とこそ伝へ聞きしに、彼等みはもとより
眷属多かり。この故に守護もくだい、目代より百貫文の褒美ほうび
錢せんを懸けさせ給ひて、彼等を搦め捕らせんとし給へ
ども、誰むかとて向ふ者はなし。かやうの障りあるによ
り、猪茸ししたけなどは愚かなこと、木を伐きることも叶ひが
たし。

○こゝに又、近頃戸隠山いんざんに砦とりでを構へて、おのゝ鬼女
と云ひふらし、数多あまたの手下を集めたる三人の賊婦
あり。その第一の頭をば射干玉ねばたまの黒姫と呼べり。こ
は近き頃、謀反によつて滅びたる城ぜうの小太郎資盛すけもりが

家の子、何がしが後家にして年は卅五六なるべし。

させる勇力ゆうりきなしといえども思慮しりょありて、謀はかりごとを好めり。第二番の頭をば越路こしちの今半額いまはんがくと渾名あだなせり。これ又資盛たけが余類あま類にて、力猛たけく武芸ぶげいを好めり。第三番の頭をば戸隠しこめの女鬼にこめとへり。これも近頃滅びたる梶原が残党ごんたうにて、力強く心剛也ごう。およそこの三人の悪たれ女、身の置き所無きまゝに、戸隠山に立籠りて数多の手下を集めつゝ、各々異形みぎやうの出立いでたちして、あたりの里をおびやかし、人を屠ほふり、物を奪うばふて、山の砦とりでに蓄たくはへたり。

註 新日本古典籍総合データベースの「傾城水滸傳、弘前市弘前図、272-190-2, E10433, 刊, 1冊, 100161093」(DOI 10.20730/100161093)の16コマ目から画像がある。なお、「江戸戯作文庫」(河出書房新社)に所収。